

泉田論文「待機児童の現状とその出生率に与える影響の分析」コメント

2010 年 3 月 24 日

水落正明（三重大学）

1. 本論文の特徴

- ・待機児童が出生に与える影響の分析。希少な研究。
- ・経済学の視点から、出生コストとしての待機児童。
- ・市町村データを使用している。
- ・待機児童と出生の内生的関係を考慮した推定。

2. 得られた結果

- ・待機児童は特定の大都市の問題。
- ・OLS による推定では影響は検出されなかった。
- ・操作変数法による推定では待機児童の増加は、わずかではあるが出生に負の影響を与えている。
- ・わが国の少子化対策として、待機児童の解消が無視してよい問題ではないことを確認。

3. 主なコメント

(1) 論文の前半と後半の関連性

- ・前半で待機児童は特定の大都市の問題であることが強調されていたが、後半の推定では、そうした問題意識が生かしきれていないのではないか。
- ・推定結果からは待機児童問題はやや軽い印象になってしまっている。大都市の待機児童問題解消が重要であることに変わりはない。
- ・そうした点を強調することで、大都市の待機児童問題を解消するための、資源の集中の妥当性などについても言及できたのではないか。

(2) 推定手法について

- ・集計データ（平均値）を用いた分析の場合、理論的には不均一分散の問題が生じる。
- ・第 1 段階の推定では不均一分散に頑健な標準誤差を用いていると記述があったが、第 2 段階の推定についても明記したほうがよいのではないか。
- ・対数化や差分データ化で不均一分散はなくなっているかもしれないが、確認はしたのだろうか。また不均一分散があった場合はウェイトつき回帰もあるが考慮したか。

(3) 第 1 段階の推定について

- ・ 第 2 段階の推定において、待機児童の影響は OLS では有意ではなく、操作変数法では有意になっている。これは内生性を適切にコントロールしたからということになるのか。
- ・ 大半の市町村で待機児童がゼロであり、待機児童の継続率も高いことから、差分データにおいてもゼロが多いと想定される。
- ・ 操作変数法では推定値が割り当てられることでデータのばらつきが増加し、OLS に比べて有意な結果が得られたと考えられる。
- ・ 待機児童変数の大半がゼロということは打ち切りデータの形になっており、第 1 段階の推定の適切性はどうか。これは潜在的な待機児童の考察ともつながると考えられる。

(4) データの限界

- ・ 市町村データとはいえ、個人が直面している状況を正確にとらえられているだろうか。
- ・ 行政単位と実際の行動範囲の乖離。
- ・ GIS（地理情報システム）の利用も一つの方法。

(5) 研究の展開について

- ・ 本論文で待機児童が問題であることは確認できた。ならばどうしたら待機児童の問題は解消されるのであろうか。
- ・ 本論文では追求していないが、待機児童はなぜ生じるのかのメカニズムを明らかにする必要が今後あるのではないだろうか。第 1 段階の推定の充実。
- ・ そこを明らかにすることで、待機児童の解消を、という政策提言がさらに具体的かつ説得的に展開できる。

4. その他のコメント

- ・ 市“区”町村データという表記が正しいのではないか。
- ・ 推定で、比率と絶対数の変数の使い分けについて説明があったほうがよいのでは。
- ・ p.4 10 万人-30 万人ではなく、10 万人-20 万人では？
- ・ p.6 (1) 式の x_h^t は x_i^t ？
- ・ p.6 (2) 式の上添え字 t はいらないのでは？
- ・ p.6 (1) 式と (2) 式でパラメータの表記を変えているが、2 時点で限界効果が異なることを想定しているのか？

(注) 本コメントは当初の論文に対するものであり、いくつかについては修正されている。